

【報告書】

第2回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会について

間 木 子 勉
熊

1. はじめに

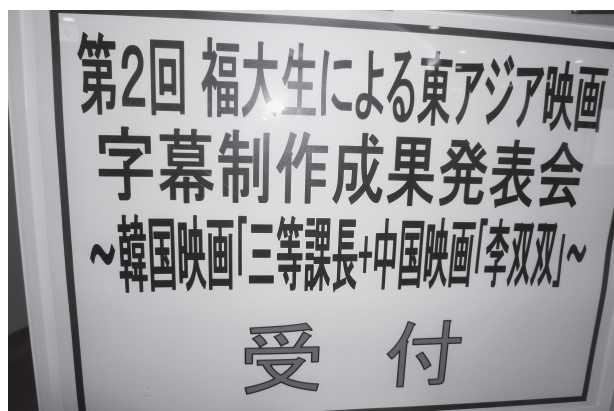
福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（韓国コース・中国コース）では、語学教育の試みの一環として、2009年度より韓国・中国映画に日本語字幕をつける作業を有志学生に行わせ、それをアジアフォーカス・福岡国際映画祭協賛企画として一般の方々に公開する行事を行って来た。本報告書は、その第2回目にあたる2010年度の上映会について総括することを目的として、主として上映会の全体像とアンケートを整理することに中心を置いてまとめるものである。

もとより、映像に字幕をつけることによる語学教育の試みは2007年より間によって授業の中で行われて来たものであった¹。これを一般上映という形で公開することとなったのは2009年からである²。2010年度の上映会は、当然ながら2009年度の上映会の問題点を意識しつつ、観て下さる市民の方々により見やすく快適な形、学生たちの語学力向上により有効であると思われる方法を採用しながら作業を行ったつもりである。しかし、さまざまな問題点はやはり課題として残らざるを得なかったのも事実であろう。

私たちは、2010年度の作業について、①字幕ソフトの導入と経費、②実際にどのような手続きで作業を行なったのかの記録、③日本語字幕を付けることについての訳の問題、以上の三つの観点から研究ノートをすでに執筆したことがある³。実際の字幕制作作業に関する課題や困難などについては、研究ノートのほうで言及を試みている。本報告書はこの研究ノートを補完するものとして、実際に行なわれた上映会の全体像を整理して提示しようとするものである。

（熊木）

2. 実施報告



2-1. 事業名

第2回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会
～韓国映画「三等課長」+中国映画「李双双」～



2-2. 概要

2009年の第1回に続き、1960年代の韓国・中国映画作品の日本語字幕を制作し、アジアフォーカス・福岡国際映画祭協賛企画およびアジアマンス登録事業として、そ

¹ 間ふさ子「字幕ソフトを使った中国語教育について」、『福岡大学研究部論叢A：人文科学編』、Vol.7, No.5, 福岡大学研究推進部, 2008.

² 2009年度の作業については、間ふさ子編『地域共生、地域貢献、福岡大学人文学部東アジア地域言語学科の取り組み—中国・韓国映画に日本語字幕を付ける』（平成21年度福岡大学特色ある教育：理論的・実践的『地域』教育プログラムの総合的構築報告書）、2009に概要を記している。

³ 李秀炅他「映画字幕作業を通じた学生への語学教育の試みについて—第2回東アジア地域言語学科学生有志による字幕作成成果上映会を中心に—」、『福岡大学言語教育研究センター紀要9号』、言語教育研究センター、2010.

の学習の成果を市民向け発表した。



2-3. 内 容

- (1) 日時：2010年9月23日（木・祝）
- (2) 会場：福岡天神エルガーラホール中ホールⅠ
- (3) 主催：福岡大学人文学部東アジア地域言語学科
- (4) 後援：アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、駐福岡中華人民共和国総領事館
- (5) プログラム：13：00 開場
 13：30 韓国映画「三等課長」紹介
 13：35 上映（105分、15：00終了）
 15：00 休憩
 15：30 中国映画「李双双」紹介
 15：35 上映（97分、17：12終了）
- (6) 入場料：無料
- (7) 上 映：プロジェクター投影。古い作品のため、映像・音声の不鮮明な部分がある。
- (8) その他：「三等課長」の映像は韓国映像資料院の提供による。
 ・アジアフォーカス・福岡国際映画祭協賛企画
 ・アジアマンス登録事業

2-4. 上映作品

- (1) 韓国映画「三等課長」1961年、監督：李奉来（イ・ボンネ）
- (2) 中国映画「李双双」1962年、監督：魯 韜（ルー・レン）

2-5. 入場者数

- (1) 韓国映画「三等課長」：78名
 - (2) 中国映画「李双双」：78名
- 合計156名（スタッフ含まず）

2-6. 配布物

- (1) チラシ（学科HP <http://www.hum.fukuoka-u.ac.jp/eas/>にも掲載）
- (2) リーフレット（当日会場にて配布。後掲）

2-7. 情宣・報道など

- (1) 福岡アジアマンス2010公式ガイドブック（後掲(1)）
- (2) 福岡アジアマンスイベントガイド（後掲(2)）
- (3) FUKUOKA ASIAN MONTH 2010 Event Schedule List
- (4) アジアフォーカス・福岡国際映画祭公式ガイドブック
- (5) 第20回アジアフォーカス・福岡国際映画祭フェスティバルニュースVo. 1 7月20日号
- (6) アジアフォーカス・福岡国際映画祭事務局日よりボランティアレポート⑦ 9月24日（後掲(4)）
- (7) エルガーラホール「9月の催し案内」（西日本新聞朝刊、リビング福岡、エルガーラホームページ、福岡市営地下鉄七隈線天神南駅コンコース）
- (8) 西日本新聞2010年9月14日（火）朝刊19面「アジアマンス16日から本格化」
- (9) 毎日新聞2010年9月18日（土）朝刊18面「福岡EVENTワイドTOPICS」（福大生が字幕制作／韓国映画と中国映画／中央区で23日に上映）（後掲(3)）
- (10) 雑誌『福岡モン』2010年9月号「Asian Movie in Fukuoka」

2-8. 観客の感想（全45通）

- (1) 韓国映画「三等課長」、中国映画「李双双」両方に対するもの：22通
 - (2) 韓国映画「三等課長」に対するもの：10通
 - (3) 中国映画「李双双」に対するもの：13通
- 詳細は後掲。

2-9. 字幕制作参加者

教員：4名

学生：人文学部東アジア地域言語学科、工学研究科東アジア文化環境専修ほか 計27名

内訳は以下のとおり。

	1年次	2年次	3年次	4年次	M2	留学生	小計	総計
韓国映画	0	0	7	2	0	1	10	27
中国映画	3	2	6	5	1	0	17	

参加学生へのアンケート結果は後掲。

2-10. 附 記

上映当日は雨模様で、観客の出足が心配されたが、足元が悪いにもかかわらず多数の市民にご来場いただいた。今年度の上映会は、字幕が見つらなかったとの意見があった昨年度の失敗を繰り返さないよう、椅子の配置にかなり気を遣ったが、それでもやはり後ろのほうは画面下に出る字幕が見にくい場合があったようだ。

当日は字幕制作に参加した学生のうち有志が受付、観客のご案内などの仕事に当たった。

韓国・中国映画を愛好する市民のほか、学科の卒業生、

学生のご家族にもご来場いただき、後輩や子弟の活躍を見ていただく機会となったことは非常に喜ばしい。

上映後にいただいたアンケートの文面から、第1回発表会にひきつづいて来てくださったかたが複数あること、次回に期待する声が寄せられていることがわかり、継続的活動の重要性を改めて感じた。

（間）

3. 昨年度の上映会の問題点と今年の注意など

第1回目の上映会で得られたいくつかの教訓や反省点をもとに、第2回目である今回の上映会において改善を試みた点などについて、若干触れておくことにしたい。第1回目の上映会で問題点として考えられたのは、①椅子の配置、②字幕そのものの見えやすさ、③空調（冷房）の問題などであった。ここで教訓として得られたのは、要するに字幕を「作る側」としての意識に比べ、映画を「観る側」に立った意識が比重として必ずしも大きく作用していなかったこと、それを再考して観て下さる方々によりよい環境で楽しんでいただく気配りを行うべき、ということであった。

第1回目の上映会での椅子の問題というのは、まず、椅子そのものの構造にあった。切り離し可能な簡易椅子であったが、すべて接合した状態で椅子を並べていたために、前の観客の方によって映像が見にくい場合、椅子をずらすことができず体や頭を動かす必要があり、これがさらに後ろの方の見づらさにつながるという悪循環があった。また、椅子を使わずに立ち見をするとしても、多くの観客の方がいらして下さったおかげで立ち見も自由にはままならない環境であった。そこで、第2回目の上映会では、まず椅子を個別に切り離し、観客の方が若干は自由に椅子を動かせるように隙間を設けた。さらに上映前に複数の学生たちを椅子に座らせ、どのような見え方になるかをチェックするなどの点検作業を行った。立ち見の方々に対しては会場の限界もあり、とくに配慮を払うことができなかったが、幸い、第2回目の上映会ではアンケートに若干の不満は見受けられたものの椅子や立ち見での見にくさでの問題は必ずしも大きくはなかったように思われる。

字幕そのものの見えやすさについては、日本語字幕を画像の下方に入れたため、フラットな床での上映会であった分、字幕が見えにくいということになってしまう問題があった。これについては第1回目の上映会の1本目

の上映であった『青春双曲線』で少なからぬ指摘があった点であった。解決方法としては二つが考えられる。一つは日本語字幕を横に縦書きで入れること、もう一つは、画面を小さくしてその分画像を上を上げ、下部の日本語字幕を見やすくすることである。中国映画『白毛女』では、急遽、後者の方法をとって対応した。ただし、若干画面が小さくなった分だけ字幕が後ろからはいささか見えにくいきらいもあったようである。歌の部分では縦書きの字幕がつけられていたため、その部分については問題はなかったようである。『青春双曲線』に比して画面が小さくなったことは、映画の迫力という点ではいささか悔いが残るところであった。第2回目の上映会では、スクリーンを調節しつつ、できるだけ映像を上を持っていけるようにし、映像の大きさにおいても字幕の見えやすさにおいても可能な範囲で問題ないように配慮したつもりである。

最後に空調（冷房）の問題であるが、これは第1回目においても「寒い」との苦情があったものであり、これを改善すべく第2回目では室内の温度に気を配り、途中でエアコンを切るなどの調節を行った。ただし、空調のコントロールは即座に室温には反映されない傾向があり、切ってもしばらくは寒い状態が続くなどしたのが観客の皆さんには申し訳ないところであった。これを是正するためには、快適な温度をあらかじめ設定し、それをうまく維持できるように工夫すること、設定した温度では実際には寒かった場合（第2回目がそれに相当する）には、温度をすぐに調整できるように早め早めに手を打つようにすべきであったものと思われる。室温については、第3回目に向けて一つの課題としておきたい。

（熊本）

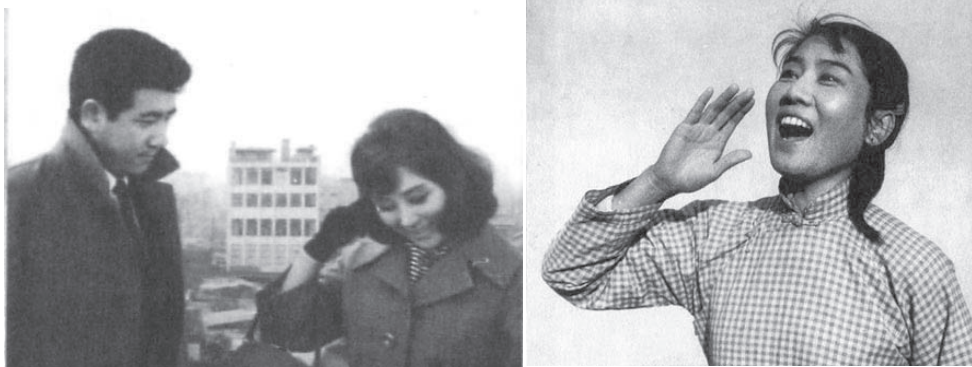


4. 当日配布したリーフレット

第2回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会 ～韓国映画「三等課長」＋中国映画「李双双」～

昨年に引き続き、今年も福岡大学人文学部東アジア地域言語学科の有志学生が 1960 年代初頭の韓国および中国映画作品の字幕を制作しました。

日本語字幕で見る機会がほとんどなかった往年の名作が、若い感覚の日本語でよみがえります。ぜひご高覧ください。



日時：2010 年 9 月 23 日（木・祝）

13:00 開場

13:30 韓国映画『三等課長』上映

15:30 中国映画『李双双』上映

会場：福岡天神エルガーラ 7 階中ホール（大丸東館うえ）

主催：福岡大学人文学部東アジア地域言語学科

後援：アジアフォーカス福岡国際映画祭実行委員会

駐福岡中華人民共和国総領事館

入場：無料

アジアフォーカス福岡国際映画祭協賛企画

アジアマンス登録事業



おことわり：上映はプロジェクター投影によるものです。古い作品のため映像・音声の不鮮明な部分があります。あらかじめご了承ください。

お喋りな映画『三等課長』

熊木 勉

1.

とにかくお喋りな映画である。セリフがほとんど途切れることがない。李奉来監督の映画『三等課長』を初めて見たときからの印象であり、また学生たちと字幕を付けつつ、あらためて実感したことでもあった。実際のところ、観客の方々の目の疲れを考えれば、字幕を付けて上映するにふさわしい映画であるかどうか、疑問でもあったのが正直なところである。

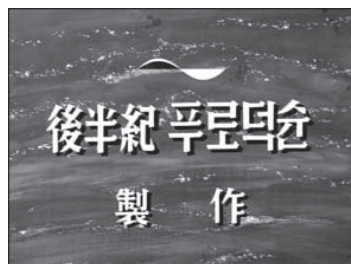
じつは、昨年（2009年）の東アジア地域言語学科学生による字幕作成上映会で韓国コースでの作業として最初に私が候補として考えていた作品はこの映画であった。しかし、セリフの多さから断念し、この映画とはまったく違った意味で魅力を感じさせる『青春双曲線』を選んだ経緯があった。今年は、勇気を振り絞り（?）、あえてこの作品の字幕作業に踏み切った。

この映画の魅力を理解するために必要なのは、ほとんど途切れることのない字幕を追いかける視力だけではあるまい。やはりその時代背景の理解が必要となる。映画の「お喋り」や所々にうかがわれる風刺は当然にその時代の空気と無関係ではなかろう。この映画を観るには、映画が制作された時代の空気を感じる想像力が、何よりも重要であるものと思われる。

この映画には当時の庶民の生きざまがリアルに描かれている。まさに生活感あふれる家族ドラマそのものである。しかし、その底流には時代を見つめ、感じ取る李奉来監督の鋭いまなざしがあるようにも見えるのである。

2.

この映画の一番最初に映し出される「後半紀プロダクション」という文字を見たとき、私はのっけから思わずのけぞってしまった。すぐにあらためてDVDケースに目をやって監督が李奉来であることを確認し、驚きは納得へと変わった。詩人・李奉来が映画界に転身していたことを私は完全に忘れていたのである。DVDケースを見て、「後半紀プロダクション」と李奉来の名が一気に結びついた。



李奉来はもともと詩人であり、評論家であった。モダニズムの影響を強く受けた詩人であったが、作品数は少ない。1950年代を代表するモダニスト・趙郷に「奉来はもう詩を書かないほうがいい」とまで書かれた詩人であった。評論家として辛うじて読ませる文章を書いた。彼はむしろ、映画人として成果を残した人物と言うのがあたっているのかも知れない。

ちなみに、李奉来の詩や評論はモダニズムの一方で伝統への志向を見せている。映画『三等課長』も家長というものの存在を扱いつつ、伝統（舅・嫁）と新式女性（姑・娘）の両方の葛藤と調和を巧みに描いている。「伝統の因子は時代の変遷を経つつも、その民族の精神生活の中に深く浸透して一つの大きな全体的経験を形成するところにあるのである（『伝統の意味』『文学芸術』1956.8.）」。この言葉は、この映画にもうかがわれる彼が意識した伝統というものの性質の一端をうかがわせるように思われる。

さて、なぜ私が「後半紀プロダクション」の名を見て驚いたか。それは、解放後のモダニズム運動と関係の深い、「後半紀」という詩人たちのグループの名を明らかにこのプロダクションは引き継いでいると思われたからである。

解放後の韓国の詩壇においてモダニズムを先導したのは「新詩論」同人であった。同人に金珉麟（キムギョンニン）・金洙映（キムスヨン）・朴寅煥（パクインファン）らがおり、詞華集『新しい都市と市民たちの合唱』（1949）で知られる。

「後半紀」はこの集まりを解体、理念的に継承したグループであった。中でもよく知られる金洙映は、朝鮮戦争時、避難をするまもなく北朝鮮に徴兵され、その後、捕虜収容所にいたため「後半紀」には参加していないが、趙郷（チョヒャン）・金奎東（キムギュドン）らがこのグループに加わり、同人誌の発行を目指しつつ、結局はそれを果たせぬままに1953年頃に解散する。

1930年代のモダニズムを先導した九人会がメンバー構成においてかなり閉鎖的な団体であったとすれば、このグループは多少、その点において融通があった感がある。ほかでもなく、李奉来もこのグループの同人であった。

1953年に解散したはずの同人「後半紀」。同人誌の発行も叶わず朝鮮戦争の停戦と時をほぼ同じくして解散することとなったこのグループの名前が、映画『三等課長』を撮影する李奉来映画プロダクションの名前として生きていたのである。ただし、継続してこの「後半紀」の名が生き続けていたわけではない。私の知る限り、1958年8月の韓国映画製作者協会会員名簿では李奉来が代表をしていた会社はこの名前ではなく、一方1961年9月の映画社を整理する映画法の施行

にあたっては「後半紀プロダクション」がヨナ映画公社に他社とともに統合されているのが確認できる。つまり「後半紀」の名が李奉来により復活していたのは、1958年から1961年の間のうち、ごく短い一期間に過ぎないことになる。しかし、その名前には、李奉来の「後半紀」への思い入れ、感情がうかがわれるように思われてならない。

朝鮮戦争・廃墟・避難。これらは「後半紀」という同人たちをとりまく環境としての前提であり、その中で彼らは新しい言葉と表現を追及したのであった。「後半紀」に参加しなかったがその前身である「新詩論」同人・金洙暎はまさに自由を詩の主題として扱った詩人でもあった。そして、1956年に29歳の若さでこの世を去った「後半紀」同人・朴寅煥の詩の、廃墟の中での哀傷。李奉来の胸に去来したこうした詩人たち、あるいは文学への思いはいかなるものであったのだろうか。「後半紀プロダクション」の名はこの映画の約10年前、解放空間の朝鮮において、あるいは朝鮮戦争の廃墟の中でモダンを追求し続けた彼らの文学を思い出させ、この時代の彼らの文学への情熱の中へと私たちを導いてくれる。

蛇足ではあるが、私には『三等課長』の登場人物である英久（ヨング）が顔、服装、性格にいたるまで、詩人・朴寅煥とそっくりに設定されているような気がしてならない。私が知る朴寅煥の人間像が、10枚程度の写真と数冊の評伝類の枠組みを超えるものではない以上、憶測にすぎないのであろうが、英久の姿に李奉来の朴寅煥への視線が強く感じられたのである。「後半紀プロダクション」という名のなせる連想に過ぎないのだろうか。

3.

この映画は1960年の4・19革命後に撮られ、1961年の春に封切された。4・19革命は、1960年の3・15不正選挙に対する李承晩政権への抗議デモが全国で勃発する中、馬山で高校生が武装警官隊に殺害されることでデモが一気に加熱、4月19日にソウルの学生デモ隊が大統領官邸に押し寄せた一連の闘争を指し、警官隊の発砲により183人が死亡、6200人以上が負傷したとされる。さらに弾圧に抗議する大学教授らのデモも行われ、4月26日、李承晩は下野を表明するにいたるのである。

まさに民衆によって政権を倒した革命であった。続いて第二共和国憲法が公布され、政権は自由党から張勉による民主党へと移り、議院内閣制がとられた。しかし、1961年5月16日、朴正熙少将による軍事クーデターが起きる。言わば、4・19革命以後、1961年5月16日までの間は、一瞬の自由が謳歌された時期であった。『三等課長』はまさにこの時期に撮影され、封切されたのであった。

ただし、張勉政権下の韓国が決して安定していたわけでもなかった。民主党の新派・旧派の対立、米国からの援助削減に伴う経済の不安定化が甚だしく、また軍縮や「自由」の拡大の一方で本質的に自由党政権時代の清算がなされたとも言いがたい部分があった。とりわけ深刻であったのは失業であった。この映画の撮影時期とも重なる1961年3月の完全失業者は240万人。これは当時の総労働人口の4分の1に近いものであった。この時期、庶民たちにあったのは4・19革命に対する二つの意識の交差であったのではあるまいか。一つは自分たちの力で成し遂げた革命であるとの自負と希望、そしてもう一つはその対極の失望感、である。『三等課長』で英久が4・19世代を誇ら

しく語り、自由を妨げるものは誰かと述べる一方、その英久は全てに疲れたと遊びまわり、賄賂は横行し、祖母は「4・19も仕方がないねえ」と皮肉を込めて言う。つまるところ、そこにあるのは革命による変化が必ずしも考えていたようなものではなかったという時代への閉塞感であろう。「自由」と「失望」の交差に『三等課長』が存在し、そこで生き生きと表現されたのが風刺であった。いちいち列挙することは避けるが、この映画の所々には、時代への風刺が明らかに見て取れる。

さて、こうした風刺が可能であったことの背景には、じつは4.19革命により国家による検閲がなくなり、審査が民間による映画倫理委員会（1960年8月発足）の手へと移行した事情も関係していることを忘れてはならないだろう。文教部の再審査があり、実質、二重審査であったことから限界はあったものと思われるが、4・19革命と5・16軍事クーデターの狭間で、わずかながらに「自由」が映画の中に組み入れられた時代であった。この時期に審査を通過している作品として有名なものに『三等課長』にあわせ兪賢穆（ユヒョンモク）監督の『誤発弾』がある。朝鮮戦争後の貧困と不安、絶望的な家庭の断面図が描かれている。そこには何の救いも描かれず、ただ絶望し彷徨する主人公と、戦闘機の音、それに呼応して繰り返される「行こう、行こう」という祖母の声が印象深く表現されている。

こうした映画のあり方は、朴正熙の新政権では許されるものではなかった。『三等課長』『誤発弾』ともに5・16クーデターのあとには公開が中止されている。

4.

『三等課長』は庶民の哀歓を描いた生活感あふれるコメディである。経済の落

ち込みと失業の嵐の中にあった時代の末端課長の姿を赤裸々に描いている。経済力もなく、権威もない父親の姿である。しかし、家族はその父親を支え、暖かな家庭を維持し続ける。こうした家族像は1960年代初めの映画にはしばしば見られるものであろう。申相玉（シンサンオク）監督『ロマンスパパ』（1960）がその代表であり、さきがけでもあったものと思われる。

生活とともにあり、時代とともにあり、また人情と愛情に富んだ映画がこの時期のホームドラマであった。『三等課長』は、まさにこの分野において『ロマンスパパ』と双璧をなす秀作であるものと思われる。コメディとしても十分に面白い。恐妻家である宋専務の行動、宋専務がおならをしたときに側近の者が述べる「すっきりなさったことでしょう」という古典的ユーモア、娘が父を真似して笑いながら述べる「失礼しました」というセリフ。この時代に關心と想像力を持つならば、ちょっとした「お喋り」の中に風刺あり、笑いありで楽しむことのできる、優れた作品であると思われる。また、この「お喋り」こそが、4・19革命を経たこの時代の一つの姿を象徴的に捉えているようにも感じられてならない。あたかも、詩人・金洙暎が革命に挫折を感じたあと、饒舌な詩へと傾いていったように、である。

最後に俳優について少し触れておこう。

まず、金勝鎬（キムスンホ）についてである。金勝鎬はまさに当代の父親像を代表する国民的な人物であった。大器晩成型でスターの座につくにはそれなりの時間を要したが、彼によって俳優という職業にステータスが生まれたとも言われるほどに、まさにこの時代において重要な業績を残した俳優であった。ただ、彼

の人生のすべてが順風満帆だったわけではない。4・19革命の前に自由党の応援演説をしていたことから批判を浴びたこともある（自宅は放火されたという）。また、のちには事業の失敗と巨額の借金にも苦しみ、結局『三等課長』上映の7年後、1968年に51才の若さで高血圧により他界することとなる。しかし、いずれにしても、俳優として『ロマンスパパ』（1960）、『ソウルの屋根の下』（1961）、『朴書房』（1960）、『馬夫』（1961）などで好演を見せた彼の姿は多くの人々の胸に刻み込まれているのは確かであろう。



英姫（ヨンヒ）役の女優は都琴峰（トクムボン）である。表情が感情豊かで、個性的な笑顔が魅力的である。都琴峰は1930年生まれであるので、『三等課長』での演技は30歳のときのものということになる。数々の映画に出演し、金勝鎬と同じく『ロマンスパパ』にも出演。申相玉監督『客間のお客さんとお母さん』では住み込みの家政婦として『三等課長』で宋専務を演じた金喜甲扮する卵売りと恋愛関係に落ちる役を演じている。申相玉監督『成春香』ではハンダン役を演じている。惜しくも昨年（2009年）亡くなったという。彼女の姿を複数の映画で目にしているが、個人的にはこの『三等課長』の都琴峰がもっとも魅力的であり、生き生きとしており強い好感を覚える。



宋専務を演じた金喜甲（キムヒガブ）も印象的である。本学科の昨年の字幕制作発表会で上映した『青春双曲線』（1956）で、通りがかりの男として当時の流行歌を歌っていた俳優でもある。この『青春双曲線』以降、金喜甲への出演依頼が殺到し、一躍人気俳優となった。上記の『客間のお客さんとお母さん』での卵売り、『成春香』の下級役人でも彼の演技を見ることができる。『ソウルの屋根の下』や『朴書房』での好演も光る。その後も長く人気を保って多くの映画やテレビ番組などに出演している。じつは、金喜甲は金勝鎬とは反対に4・19革命以前、自由党の御用芸能団体の指示に従わなかったことから、当時の芸能界を牛耳っていた林和秀（イムファス・朴正熙政権下で死刑に処された）に肋骨を折られる暴力も受けている。全治4週であったという。

俳優たちは下積みなどを経て、演技の世界へと入るだけでも大変なことであったが、時代の要求に答え、また、時として政治の要求に答えなければならないこともあった。いずれの俳優もそれぞれに立場こそ違え厳しい芸能界での苦労を経ているといえるのであろう。現在の「韓流」の俳優たちとは一味違った、貧しい時代の中、韓国映画の発展のために全身全霊を捧げた俳優たちの姿が、そこにあるように思われるのである。

<参考文献>

- 武田幸男『朝鮮史』山川出版社、1985。
鄭琮樺『韓国映画史』韓国映像資料院、2008。
李英一『韓国映画全史』[改訂版]ソド、2004。

（福岡大学人文学部東アジア地域言語学科）

意外な贈り物と 『三等課長』

李秀炅

とても個人的な話ではあるが、昨年の春、韓国にいる母が久々に日本に来たときのことである。ある日、本棚にあるものをあれこれ見ていた母は『アジア映画の奔流』（福岡大学人文学部東アジア地域言語学科開設 10 周年記念冊子）に掲載されたハングルで書かれた私の文章に目をとめ、メガネを取りだした。大したことは書いてないと読まれるのを拒んだのだが、一気に読み終え「これくらい私にも書ける」とつぶやいた。「じゃあ、お母さんも書いてみたら？」と言ったら、70 歳の母は「手で書くのは面倒だ」と言う。日記も書いたことのない母が本当に書くのだろうかと半信半疑ではあったがパソコンの初歩的な使い方を教えると、何とか打ち方だけは覚えて韓国に帰っていった。

それから間もなく母から短いメールが送られてくるようになった。私の返事を見てはすぐに文体や記号の使い方などを真似て、つづりも自分で辞書（しかもネットの辞書）を調べながら確かめ、書くスピードも速くなり（チャットもできるようになったのだ）、文章の良し悪しはともかく、普通程度に文章が打てるようにまでなった。そして、とうとう去年の夏に長編の第一部が送られてきた。母の記憶をたどって「1945 年 8 月 15 日、時は解放の日…」から始まるその文章は、周りの出来事や思ったこと、さらには曾祖母から聞いた朝鮮王朝時代のことなども交えて、なんと 15 万字にも達していた。最初は量に驚いて、そのうち力尽きるだろうと思う一方で、あんな小さい頃のことをよくも覚えているものだなと感

心していた。ところが、それから母の文章はどんどん送られてきて、いつの間にか私はその内容に驚かされ、笑われ、泣かされるようになっていた。今年の夏、1945～1975 年の 30 年分（12 編 110 万字ほど）を読み終えたとき、自分の愚かさにも気付いた。私は母のことや家族のことについてあまりにも無知であったと。

母の文章に興味をわき始めたころ、ちょうど昨年の上映作品『青春双曲線』の字幕作業が終わった。そのせいか、『青春双曲線』の舞台となった釜山の昔の風景を見て、ちょうどその時期にその街で青春を迎えていたはずの父のことも気になってならなかった。

そして今回の作品『三等課長』。半世紀ほど前の作品であるにも関わらず、昨年の作品よりはるかに親しみを覚えた。もちろん私が韓国人だから懐かしく思うことも多かろう。しかし、私はいわゆる 386 世代¹。さすがに 50 年前のことは分からない。どこかで会ったようなあの奇妙な感じの正体はおそらく母の物語に登場した人々なのであろうと。

その人々の話は後にし、先に懐かしく思った場面をいくつかあげてみよう。「英姫」の家族の住んでいる家は、私が生まれ育った家の構造とそっくり。玄関、2 階の量の部屋、1 階はオンドルに改造する家が多かったが、それも同じだった。煉炭がまだ高かった 60 年代は、火炉（火鉢）を使う家庭も多かった。火炉を囲んでいる家族、火炉のやかん、大きな筆箆までも昔のうちを連想させた。もう一つは「英姫」のバッグが落ちたノンマジュイが背負っていたかご。「ノンマジュイ」と言われる屑拾いの姿に何十年ぶりかでこの映画で再会。私の小学生の頃はまだ、

彼らは街を闊歩していた。母の文章にも物乞いや傷痍軍人（戦争で負傷し働けない人）の群れのことが詳しく書いてあった。映画には出てこないが、朝鮮戦争が終わってから 70 年代の初めまで、どの家庭でも食べ物やお金をくれと乞う人々の訪問を 1 日に何回も当たり前のように受けていた。屑拾いも物乞いをするとはあるが、一応自分で働いて生活しているのでそれほど嫌がられる存在ではなかった。一方で、母は税金取りの訪問が一番不愉快だといつも言っていて、そのやり取りを目の当たりにしたこともある。税金取りの横暴（最初から担当者に賄賂を上乗せして渡さないと、次回の税金がどんなでもない数字になるとか）は物乞いの訪問とほぼ同時代に存在しつつも、おそらく両者の行き先は正反対だっただろう。

さて、この映画に登場する人々だが、とりわけ女性たちに着目すると、それぞれが見事なほどその時代を代表しているように思える。

何の飾り気もなく、はきはきした口調で「お父さんのその性格が嫌なの。考え方が卑屈だから。専務の前だから仕方ないじゃない？」と言う英姫。伝統的な女性の一面を持っていながらも、現実的で社会に出て働き、自分の意見も巧みに主張し、目上の人にも上手に甘えられ可愛がられる。美容体操、顔のバック、ファッション…今の女性とほとんど変わらない。英姫の姿は、戦争や 4・19 革命以降の社会の混乱の中で、一つの女性像を提示していたのかもしれない。一方、英姫の母役の女優は、他の映画でも「韓国のお母さん」を代表しているが、この作品でも典型的な伝統女性を見せてくれる。むしろ、英姫の祖母の方が年寄りでありながらもあらゆる出来事に興味を示し、

自分の意見をしっかり述べているが、意外と姑としての権威的な面はあまりない。今の韓流ドラマに登場する姑よりも近代的だ。この3人の女性が私の母、祖母、曾祖母の姿にとっても重なって見えるのは、単なる偶然であろうか…。「男が自分の役割を果たしていないのに、女だけがどうして女の義務を果たさなければならないの？」という宋専務の妻の台詞からも、儒教社会の家父長制がすでにかなり揺らいでいることが分かる。さらに、英久のガールフレンドは「アプレガル」ⁱⁱで、今の若者顔負けの生意気さを持っていないが、根はしっかりしていて、「4・19革命」の主役である大学生英久さえもやり込めるつわものだ。他方、ダンサーで宋専務の妾である明玉はこの物語の問題の発端になる。おそらく彼女は50年代

にダンサーとしての全盛期を迎えていたのであろう。作品の中では典型的なアプレガルとは多少異なるが、彼女をアプレガルの終着地であるかのように描いているとも解釈できる。しかし、アプレガルであれ何であれ、妾になることだけはやはりよくないと改心し、妾であることをやめ、心の安寧を取り戻す。

作品の登場人物の中でも特に女性たちの言動に注目したのは、時代の変化における女性の目覚め、抵抗、合理性の追求、この作品の中で何気なく語られる伝統と革新の共存など、その時代を生きた母の経験とどうしても重なっていたからであった。彼女たちの台詞は、現在の観客には陳腐な表現にすぎないと映るかもしれない。しかし、日帝時代を生き抜き(少

なくとも日帝時代が終わったところ物心が付き)、まもなく朝鮮戦争で恐怖と裏切りを怯え、戦後の廃墟の中で青春時代を迎えるも生きることに必死だった女性たちの姿だと思うと、一見ポジティブに見える愉快的なコメディにも、彼女たちの涙のにじんだ痕が重みをもって感じられる。

(福岡大学言語教育研究センター)

i 韓国において1990年代に30代(3)で、1980年代(8)に大学生で、1960年代(6)の生まれである世代のこと。今は40代が多いが、もうすぐ50代の人も増えるだろう。80年代の民主化運動に参加。軍事政権を打倒し、文民政権を獲得した主役である。今の韓国社会を支えている世代でもある。

ii フランス語のapres guerreと英語girlの合成語で、1950年代韓国で流行したことば。一切の伝統や道徳に縛られず自由に生きる女性を言うが、徐々に「遊ぶ女」のイメージとして定着する。

学生たちの声

今回の映画の字幕作業は、貴重な体験となりました。単純に台詞の韓国語を和訳するのではなく、文字数や日本語らしい言い回しを考えなくてはなりませんでした。繰り返し注意して場面を確認していく作業は大変でしたが、みんなで協力して生き生きとした字幕が完成していき達成感を得られました。M.M(4年生)

『三等課長』は、セリフ数が多くて韓国語のリズムがとても好きでした。4.19革命など、当時の社会背景も描かれていて、勉強になりました。高木彩(3年生)

今回の字幕作業で特にたいへんだったのは、バスケットボールのシーンでした。そこは台詞の中でカタカナが多かったので、少ない文字制限に収めるのがたいへんでした。ですが、今回の「三等課長」は去年の作品よりかなり

コメディが強かったので、訳す過程は大変ながらも楽しみながら取り組むことができました。熊本彩奈(3年生)

字幕作業は初めてだったので字数内でおさめるのが難しかったです。また、当時の韓国の時代背景も分かり面白かったです。もしまた機会があれば参加したいです。加藤瑠里子(3年生)

私は去年に引き続き字幕作業の手伝いをしました。去年は初めてで、何についても時間が掛かっていたのですが、今年は台詞が去年の倍あるにもかかわらず、スムーズに作業を終わらせることができました。この作品中でおばあさん役をされていた女優さんは有名な方で、私たちが去年手掛けた「青春双曲線」にも母親役で出演されていました。古い映画の中でも、一人の俳優を違う映画で見ることができたことはとてもうれしかったです。岡本華緒

莉(3年生)

ちょっとした会話にも実は、当時の韓国の社会背景を反映しており、限られた時間と時数で、年代も国も異なる人を対象に表現する難しさを実感しました。しかしながら、そういった何気ない生活に社会を風刺する面白さが韓国映画の魅力であり、長編の字幕作業を楽しくできた秘訣だと思います。大塚智愛(4年生)

今回、韓国映画の字幕作業を行って、今の自分に韓国の知識、韓国語の語学力がどれほどの実力があるか試せたが自分が納得のいくものには程遠いものだとうわかった。しかし学べたことはたくさんありこれからも韓国を知っていかなければならないと思った。匿名希望(3年生)

中国映画「李双双」

間 ふさ子

中国映画「李双双」は 1960 年から 1962 年にかけて構想され制作された映画である。

1960 年というのは、1958 年から始まった「大躍進」政策が破綻をきたしはじめ、大量の餓死者を出したいわゆる「3 年自然災害」のただなかにあった時期であり、1962 年といえば、大躍進の失敗を挽回すべく調整政策が採られはじめた時期にあたる。つまりこの映画は中国の政治が左から右へと大きく揺れた時期に作られたということになる。

もともと新中国において文化芸術は政治に奉仕するものと位置づけられており、とくに映画は農民を中心とした非識字民衆に向けての政治宣伝の有力な道具として考えられていた。従って、映画の構想を練る時期には左の路線が有力であったのに、撮影に入ると右の路線に転換しはじめたなどという事態は、映画人にとって悪夢以外の何物でもないだろう。

当初、映画化は脚色を担当した李準の「李双双小伝」という小説を元に進められていたが、実際には両者の内容は全く異なっており、共通しているのはヒロイン・李双双とその夫・孫喜旺の名前くらいである。これは上記の事情を考えればとくに不思議ではない。

小説の李双双は三人の子持ちで、女性を家事労働から解放して生産に参加させ、村を「大躍進」させるため無料の食堂を開くことを思いつく。小説ではそれで村人たちの生産意欲が高まったことになっているが、現実の公共食堂は大量の食糧を浪費しただけの大失敗に終わり、1961 年の夏頃には中央から中止の指示が出て

いた。躍進の象徴が瞬く間に挫折の象徴に変わってしまったのだ。これを題材に映画を撮ることは不可能であった。事実、ロケ地に選ばれた河南省の共産党書記は、公共食堂の話だと聞いて即座にロケ隊の受け入れを断ったという。

折悪しく李準が入院中で執筆不能であったため、監督の魯軻はやむなく自分で新たなプロットを考え出し、公共食堂ではなく労働点数をめぐる「公」と「私」の矛盾のなかで李双双を活躍させることにした。その後、病の癒えた李準の潤色を経て現在の作品の基本型ができあがり、説得の結果、河南省書記もようやくロケ隊の受け入れに同意したという。内容の変更に伴って、タイトルも「李双双小伝」から「喜旺嫂子（喜旺兄さんの嫁）」、そして「李双双」へと変わった。政治の波に翻弄された結果である。とはいえ、この変更こそが「李双双」を単なるプロパガンダの域に留めることなく、時代を超えて人々の鑑賞に堪える映画にしたのであった。

「李双双」は、大躍進と 3 年自然災害の直後に作られたものでありながら、作品の基調は明るく、当時の中国の人々の将来に対する期待と希望を感じさせる。しかも生活感があふれている。その理由はどこにあるのだろうか。

中国の文学研究者・陳思和は、「李双双」は「表に現れた図式」と「隠れた図式」を併せ持つ作品で、「目に見える図式」である政治宣伝の奥に配置された「隠れた図式」によって観客の共感が引き起こされたと指摘している。彼の言う「隠れた図式」とは女性と男性のペアで演じられる東北地方の民間芸能「二人転」のことで、これは、女性が常に上位に立ち、男性は女性の下位に甘んじて、滑稽なことをしながら女性にちょっかいをかけて気

を引き、観客の笑いを誘うというのがお決まりのパターンであるようだ。

陳は、双双と喜旺の関係がまさにこの「二人転」の図式そのものであり、「夫婦げんか」→「夫を推薦」→「決まりごと三つ」→「喜旺の家出」→「夫を迎える」→「二度目の家出」→「夫婦仲直り」と二人が衝突しながら進んでいくストーリーは、実は「結婚してから恋愛する」という二人の恋愛の過程を描いたもので、これを探り入れたことで「李双双」が単なる政治宣伝に終わらず、作品として成功することにつながったと言う。

主人公たちの存在感が「李双双」という作品に厚みを与えているのは確かだ。双双は働き者だが思ったことをすぐ口にして、よく泣きよく笑う女性、喜旺は人は善いが見栄っ張りで他人の機嫌を損ねることをおそれ、目のまへの利益に動かされやすい男、どちらも「いるいる」と中国の民衆に思わせるような人物である。この人物像を見事に演じきった二人の俳優の名演技がこの作品を支えていると言っても過言ではない。

双双を演じたのは張瑞芳、1918 年に河北省で生まれた彼女は大学生の時に話劇運動に参加し、四大女優の一人と称せられた。中華人民共和国成立後は話劇と映画の双方で活躍していたが、1951 年に上海電影制片廠の所属となり、それ以後は映画に専念した。代表作に「家」（陳西禾監督 1956 年）などがある。今年で 92 歳になる。

喜旺を演じた仲星火は張瑞芳より 6 歳年下の 1924 年生まれ。安徽省出身。1949 年に上海電影制片廠に入り、多くの映画に出演した。彼の名を一躍有名にしたのは、1959 年の「今天我休息」（魯軻監督）である。ある警官の多忙な休日コミカルに描いたこの作品で彼はお人

好しの主人公を好演した。喜旺役はもともと大スター趙丹が演じたがっていたが、魯靱が仲星火を見込んで配役したという。彼もまだ健在である。

「李双双」は中華人民共和国が生んだ新しい人間像を描いている、とされる。小説の李双双は家事労働からの脱却を目指して公共食堂を提案するなど、確かにそういった要素をふんだんに持っているが、映画ではどうだろうか。映画の李双双は確かに直情径行だが、それほど政治的な人物には見えない。家にいる彼女はほとんど食事の支度か針仕事をしていて、伝統的な農村の女性のイメージを色濃く残しているように見える。

とはいえ、彼女の地位は確実に変化していく。このことは彼女に対する呼称の変化からもわかる。村人たちは「喜旺嫂



十本の指を伸ばせば……

中国語の比喩表現と説得の技法

甲斐 勝二

字幕は映像で活躍する俳優の言葉と平行してつける必要がありますので、限られた時間内に収まるようにつけねばなりません。これが書籍なら、一行に満たない原文でも分かりやすいようにと二行三行に言葉を増やし、その上注釈までつけて訳す事も可能です。字幕の場合は映像に遅れるわけにはいかず、複数の事柄が語られていても、その中で重要な部分を選んで字幕に掲げねばなりません。その

子」と呼ぶが、彼女が生産隊の婦女隊長になったことで「隊長」と呼ぶ人も現れ、人民公社の劉書記や町のトラック運転手・王からは「李双双同志」と呼ばれる。夫の喜旺はというと、他人に対しては「俺那個做饭的（俺のあの飯炊き）」、「我那屋裡的（俺の家の者）」などと言い、本人に向かつては「小蘭她媽（小蘭の母さん）」と呼んでいる。ところが、映画の終盤になって喜旺の呼び方が変わる。「双双」と呼びかけるのである。中国では、大家族（村などの疑似的な家族も含む）のどの世代に位置するかでその人の呼称が決まる。そのため映画字幕では人物呼称の処理がとくに厄介で、今回もほとんど無視せざるを得なかった。だが、喜旺が初めて彼女に「双双」と呼びかけたところだけは字幕にも採り入れた。どのあ

結果、話の流れに関して枝葉の部分は割愛という事になります。ここでは、《李双双》の字幕作り中割愛したいくつかの言葉を通して、中国語に見られる説得の方法についてお話させていただきます。

まずは、李双双の提案で、労働点数がちゃんとつけられるようになり、女性達が綿花のつばみの摘み取り整理をした場面での発言を上げましょう。皆で集まり作業の点数を相談するところです。農作業にいそむ女性の中には、どうやら農村出身ではなく農業作業が苦手なものもいます。大鳳がそうで、その点数つけを廻って李双双から批判を受けます。その時、大鳳は以下のようにのべ弁解しました。

“十个手指头伸出来还不一般齐呢，谁敢说就打得那么干净。”

これを直訳すると：“十本の指を伸ばし

たりで喜旺の台詞字幕に「双双」の文字が現れるか、ご注目いただければ幸いです。

中国映画「李双双」は政治の激動期に生まれた。そのことは創作者たちに大きな困難をもたらしたが、それゆえに、現象を描くのみならず、人間の性格を掘り下げていくことになり、結果的に作品の成功をもたらした。表現が自由な時代より不自由な時代のほうがより優れた作品が生まれるという逆説はこの「李双双」にも当てはまるかもしれない。

（福岡大学人文学部東アジア地域言語学科）

〈参考文献〉

李準「李双双小伝」『人民文学』1960年3期
陳思和主編『中国当代文学史教程』復旦大学出版社1999年

てみればやっぱり皆同じではないでしょ。私が皆と同じように上手く摘めるわけがないわ”というところでしょう。つまり、人は本来それぞれ違うのだから、その違いを前提にして評価されねば困る、という主張です。この大鳳は生産隊副隊長金樵の奥さんでどうやら良いとこ育ち、農作業の経験はまだまだのようです。この部分で字幕に許される文字数は20字程度しかありません。そこで、今回の字幕では前半にでる十本の指の比喩を省略し、“全部きれいにするなんてそんなの無理よ”とする事にしました。

同様の比喩が、映画の後半でもできます。李双双の旦那喜旺が荷馬車による運輸隊より戻り、女性達の農作業への参加とその成功に感心するのですが、その一方で運輸隊で行った西瓜運送費の“ネコババ”事件を思い出し、妻の李双双に“こっそり上手くやっているやつもい

る”とため息をつく場面です。その言葉を聞いた李双双はそれは誰かと尋ねますが、喜旺は人間関係から仲間の名前を出すわけには行かず、お茶を濁して答えません。その時、李双双はやんわりと以下のように声をかけました。

“十个手指头伸出来还不一般齐呐, 还能都没有私心。”

直訳すれば: “十本の指を伸ばしてみればやっぱり皆同じではないでしょ、みんながすべて私心(こっそり上手くやろうという心)がないのは無理だ”となります。ここで字幕に許される字数は14字程度、ここでは“指も皆長さが違うんだから”と前半の比喩の部分を取り上げ、後半を省略しました。話の流れからすると、李双双が直接述べたいのは後半の部分、つまり「人さまざま」というところですから、後半を字幕に挙げて話も繋がるでしょう。しかしながら、ここでは前半を選ぶのが良い。それは、次に対応する喜旺がこれを聞いて応える以下の言葉が理由となります。喜旺はこの言葉を聞いて“可不是吗, 你这话说得就是合乎情理。”(まったくだ、お前の話は道理にそうものだな。字幕: なるほどその通りだな)と納得し、隠していた話を始めました。ここで、喜旺が“なるほど”と納得したのは李双双の前半部分の十本の指の比喩の持つ現実的な感覚ではないでしょうか。誰の指も十本が同じ長さではない、これは皆が認める現実的状態です。よって我々仲間にも同様の状況があるのは不思議ではない、と心底納得し、それならと喜旺は李双双に本当の話を始めたとして解釈できるのです。よって、ここは比喩の方を訳すのが良い、と考えています。

この比喩を使う説明は各言語で見ることが出来るものですが、中国語の中ではとりわけ多く見かけるように思われます。上手く使えば、ユーモアもできま

す。例えば、映画の中にでてきた公社の劉書記と李双双の会話の場面を思い出して下さい。ここでは、問題を起こした旦那の喜旺を李双双が弁解しながら紹介するところで、以下のような会話がなされました。

双双: 我们那口子可是个没星秤。(うちの人は目盛りのない秤^{ハカリ}なの)

劉書記: 什么? (何ですって?)

双双: 没有星星的秤。(目盛りのない秤なのよ)

就是说, 心里没有准主意, 耳朵根子软。(つまりね、ふらふらしてるのー主体性がなく、人の言いなり) 懂吧? (分かるでしょう)

劉書記: 懂! 懂! (なるほど、なるほど)

会話の中で突然“うちの人は目盛りのない天秤計りなの”とでてくると、それは奇妙です。聞き手は比喩と分かってても、それが何を意味するのかはすぐには分かりません。聞き手はおもわず“何ですって?”と尋ねてしまいます。尋ねられればこちらのもの、相手を上手くこちら側に引き込んだわけです。そして“目盛りのない秤(→それではものの軽重は計れない→)自分で事物の善し悪しの判断ができない”と説明します。この説明で初めの比喩を理解し劉書記は“なるほど”と感心するわけです。

このような謎解きの如き表現は、中国語では非常に良く使われるので“歇后語(後ろを休む言葉)”という表現ジャンルができあがっています。“後ろを休む”とは、まず最初に何かの表現を示し、そこから後に推測を導くというこの表現形をいいます。先ほどの十本指の比喩も、“十个指头”の部分だけ示せば十分“歇后語”となり、後に“不揃いだ・それぞれ違う”などの意味を導くものとなります。もつとも、場合によっては十本の指から“二

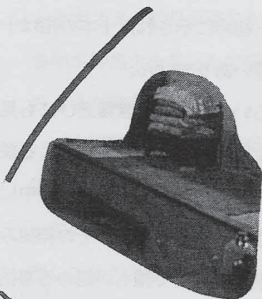
本の手”という意味を導く事もできます。それでも、初めに示された十本の指は十本の指に違いありません。

おもしろいのは、一見言葉遊びにも見えるこのような表現も、中国語による説得の形式を考えると、その枠組みの中にちゃんと当てはまる事です。その枠組みとは、最初に具体的で誰もが認める事柄を確認させ、それを比喩として主張を導き相手を納得させようとするものです。これは押韻の対句という二句のバランスを利用した表現を用いると効果が更に増します。例えば“たくさん食べ過ぎると身体を壊す、たくさん話すと人間関係を壊す(食多伤身, 话多伤人—身・人で押韻)”などの警句は、初めの一文は確かにその通りなので、その勢いで後ろの一文も確かに、と思ってしまう。勢いで納得させるといえば、“良い犬は家の鶏は襲わない、良い男は奥さんを殴らない(好狗不吃鸡, 好汉不打妻—鸡・妻で押韻)”などの例が良いかも知れません。犬と旦那が同レベルでは困りますが、“良い”事に間違いはありません。

この技法で物語を使ったものもあります。「矛盾」であるとか「井戸の中の蛙」の寓話などがそうです。そこでは何処にでも有るような物語が引かれますが、ただそれだけではありません。そこには普遍的な道理が内包され、聞くものはその道理の方を主に思いやってなるほどと納得する事になります。

このような事実の確認から導かれる発想法を知ると、中国で今でもしばしば使われて現実への対応の原理を語る“实事求是(事実に即して正しい方法で問題に対処する)”という言葉も当然の姿勢のように思われますが、事実の認識の仕方は、欧米とはいささか違うような気がします。

(福岡大学人文学部東アジア地域言語学科)



オンドルとは朝鮮半島や中国の華北北部・東北部で普及している床下暖房である。中国では炕（カン）、朝鮮で温突（オンドル）とよぶ。本来の形式は台所の竈で煮炊きしたときに発生する煙を居住空間の床下に通し、床を暖めることによって部屋全体をも暖める設備。炊事と暖房とが兼用でき、床下暖房で暖房効果がよいため、現在でも中国、朝鮮の北緯40度以北で推定1億人が使用している。

オンドルとは？

虎のくつについて



ヤオトンについて...



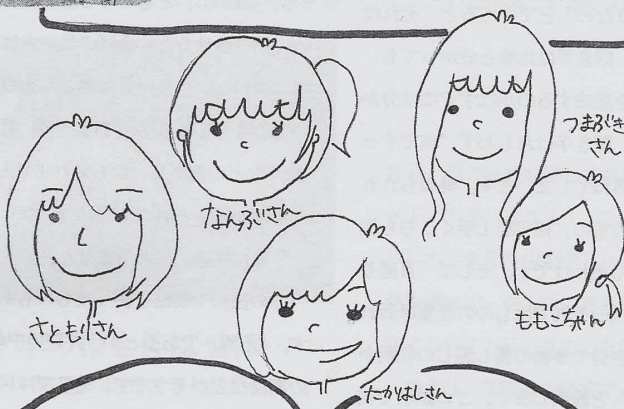
「李双双」には出てきませんが、中国の代表的な住居の一つにヤオトンとよばれる横穴住居があります。中国語でヤオは住居用横穴、トンは奥の深い横穴の意味になります。外観はレンガ組構造・切妻瓦葺屋根で囲まれていて外から入口（壁にあいた穴）→中庭→家の順番になっています。映画『黄色い大地』に出てきます。

元気に遊ぶ虎の子のように「我が子も四方へ出掛けるようになって欲しい!」という子どもの健やかな成長を願って守護神として虎の靴を贈るしきたりがある。

虎は、悪霊を恐れさせる力があると信じられてきた。また、額のしま模様か「王」の字に似ていることもあって、古くから「野驢の王」と言われ、人を食べる怖い動物とされるのが一般的な通念でもある。

★中国映画「李双双」日本語字幕制作

谷口由華・内田敦凡・
里森麻美・高橋めぐみ・
本多萌衣・宮崎千敬・
山下はな・大藤桃子・
妻夫木ひろ・南部見穂



女生について

この映画では、家庭のなかで双双が派手に泣く場面が五回ある。涙をおさえシクシク泣くことが美とされている日本人からみると、何かわざとらしく不思議に思われる方も多いのではないだろうか。

実は、中国では、女性が泣くということは、昔から魅力的なこととされてきた。後漢末に、「愁眉啼粧」という化粧法が流行したことからもそれはいえる。「愁眉啼粧」とは、眉を細く曲折して描き、目の下だけ薄く化粧し、涙を流したようにみせる化粧である。

また、現在もお葬式などでは、「慟哭」といって、声を出してオイオイ泣くことが美とされている。

以上のように、中国では感情を表立って表し泣くことが、そう珍しいことではない。よって、あのような場面が出来上がったのではないだろうか。

中国では五四運動以来、数々の女性解放運動が行われ男女平等を訴えてきたが、中華人民共和国成立後、女性には法律によって男性と同等の社会的地位を持つと定められた。毛沢東も「婦女能頂半边天」（女性は世界の半分を支える力をもつ、「時代不同了、男女都一样」（時代は変わった、もはや男女はすべて同じである）と言っている。しかし映画の中では、喜蓮は双双を見下しているように思える。おそらくこれが現実だったのだろう。時代が流れ思想が移り変わる中で、自発的に行動を起こす双双は、なんとも頼もしい女性である。

音楽

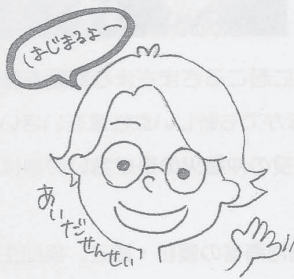
1961年秋、上海電影制片廠が『李双双』を撮影しに河南に来た。

当時、二夾弦劇団が村で『柳巷記』を上演しているところで、監督の魯轅がその芝居を見て非常に気に入った。『李双双』の中の一場面で公社の社員達が芝居を見るシーンがあるのだが、魯轅はまだどの芝居を選ぶのが決めていなかった。彼は、『貨郎磨房』が喜劇であること、また、二夾弦には素晴らしい魅力があると考え、劇団の団長に相談し、最終的に劇のストーリーに最も合う『貨郎磨房』を選んだ。さらに、作曲家の向毅も二夾弦のメロディーを用いて、映画の伴奏曲「小扁担三三三」を作曲した。

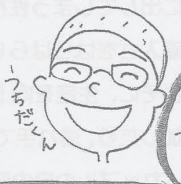
参考文献 『李双双—從小説到電影』中国電影出版社 1979年
『岩波現代中国事典』岩波書店 1999年ほか



★協力
浜崎菜々子・松岡里紗



ヌヌヌ



喜旺劇場



○喜旺がオンドルの上で口ずさむ芝居の一節

ここで彼が歌っているのは『花木蘭』の一節である。ここは功績を挙げて帰ってきた花木蘭が男装を脱ぎ、女性の姿になり、元帥と会う場面で、恥ずかしさの中にも喜びが満ち溢れている一幕である。喜旺役の仲星火によると、あの場面で喜旺の気持ちに合っていると、この曲を選んだそうだ。

○喜旺が家路に着きながら口ずさむ芝居の一節

この場面で喜旺が歌っているのは豫劇(河南省の伝統劇)『南陽関』に出てくる一幕で、宰相の伍雲昭が敵を迎え討つために出陣する場面である。この歌の文句は仲星火が幼い頃に故郷で流行っていた有名な男役趙義亭の十八番であった。妻の意見が認められ、自身にとっても大変光栄なことだと思っている喜旺の心情に合う歌として仲星火はこの一節を選んだ。

李双双小学校

人民公社などで労働量を計算する単位。労働の種類や仕事の量、その出来栄などによって1日に働いた労働量を点数として付け、年1回の総決算のさいに現金と換算する。一般的に1日の労働で付けられる労働点数は10点。この映画では労働点数のことを主に「工分(gongfen)」と呼んでいる。ちなみに労働点数は総計算の基準であって、現金ではない。また年1回の総決算が済むまで労働点数の現金換算率は解らないため、映画で李双双が去年の秋に喜旺が一晩中計算していたというのは、恐らくこの総決算の現金換算の事と思われる。

労働点数について
人民公社について
Look

人民公社とは中華人民共和国において、郷(村)を単位として結成された組織である。

1958年8月、全面的な農業合作社である人民公社の推進により、10月末には全国74万余りの合作社は2万6000余りの人民公社に改組された。合作社と本質的に違うのは、「政社合一」といって農業経済運営だけでなく、工業農業、商業、文化教育、軍事の政、経、軍事の全面にわたる総合運営をすることである。財政では公社管理委員会、生産大隊、生産隊(生産小隊)の3つの所有に分けられ、農作業は生産隊ごとに共同で行われたことに大きな特徴がある。

映画のなかで、喜旺や金樵が「副業」として輸送隊の仕事に出る場面があります。この「副業」は何のために行われたのでしょうか?

1950~60年代、中国の農村では、人民公社の下で集団生産が行われ、収穫は労働点数によって平等に分配されていました。しかし、年金・教育・医療費補助といった社会保障を国から受けられたのは都市労働者のみで、農村では人民公社がそれを行っていました。そのためにはむろん公社にお金が必要です。そのほかにも、農業生産に必要な農具や肥料等の購入(生産隊単位で買う)にもお金は必要でした。そういうわけで、喜旺たちが「公社のお金」を稼ぎに副業に出ていたのです。

副業の最中、喜旺たちはスイカ運びを引き受けます。金樵と孫有はその代金を着服してしましますが、着服された30元というのはいったいどの程度の金額なのでしょう。

日本の内閣府が発表している『年次世界経済報告』の昭和49年版に、人民元2元で買えるものとして米5kg、小麦粉5kg、牛肉1.3kg等が挙げられています。この小売価格は「1952年以来ほとんど変動していない」そうですから、単純に考えて30元で米75kg(!)が買えたわけです。金樵たち、けっこうな金額を懐に入れていたんですね。

順口溜について

順口溜(シュンコウリウ)とは、民間で流行っている話し言葉による韻文の一種です。その口ずさみやすさが特徴で、政治や世相などを風刺するものがほとんどです。映画『李双双』の中では、双双が村の掲示板に貼って意見を訴えた貼り紙が順口溜で書かれています。

ここで一つ私が面白いと思う順口溜を紹介します。現代の世相がうまくとらえられていて、日本人の感覚でもリズムのよさと面白みが感じられると思います。

没銭的時候、養猪;有錢的時候、養狗。

(金がない時豚を飼い、金がある時犬を飼う)

没銭的時候、在家里吃野菜;有錢的時候、在酒店吃野菜。

(金がない時家で野菜を食い、金がある時ホテルで野菜を食う)

没銭的時候、在馬路上騎自行車;有錢的時候、在客厅里騎自行車。

(金がない時道で自転車に乗り、金がある時応接間で自転車に乗る)

没銭的時候想結婚;有錢的時候想離婚。

(金がない時結婚したいと思い、金がある時離婚したいと思う)

没銭的時候老婆兼秘書;有錢的時候秘書兼老婆。

(金がない時妻が秘書を兼ね、金がある時秘書が妻を兼ねる)

没銭的時候假装有钱;有錢的時候假装没钱。

(金がない時あるふりをし、金がある時ないふりをする)

韓国映画
三等課長
삼등과장

制作年: 1961 年

監督: 李奉来(イ・ボンネ)

出演: キム・スンホ(具所長)

ト・クムボン(具英姫)

パン・スイル(権五哲)



リズム感ある台詞で構成された本格コメディ映画。社会風刺を所々にうかがわせる作品でもある。

三千里運輸株式会社東部営業所長である具所長の娘である英姫(ヨンヒ)は父と同じ三千里運輸株式会社に就職する。そこで目にしたのは宋専務に頭の上がらない父の姿であった。しかし、英姫は父を理解して励まそうとする。一方、具所長は専務に頼まれ専務の愛人のために営業所の2階にダンス練習場を作り、本社の厚生課長に昇進。この職は社員らの福利厚生のための職で、いわば「三等課長」とされていた。そうした中、バスケットボール大会で活躍した権(クオン)も厚生課の所属となるが、英姫と権は誤解から互いにいがみ合う仲となる。その誤解は、愛人の正体が明らかになることで解決するが…。

★この映像は韓国映像資料院の提供によるものです。

中国映画
李双双
Lǐ Shuāngshuāng

上海海燕電映制片廠 1962 年作品

監督: 魯韜(ルー・レン)

出演: 張瑞芳(李双双)

仲星火(孫喜旺)

張文蓉(桂英)



人民公社化初期の農村に起こるさまざまな問題を軽妙なタッチで描いた作品。なかでも新しい女性像をいきいきと演じた張瑞芳とその夫役の仲星火の掛け合いの妙はみもの。

1960 年代初めの中国河南省の農村・孫莊。集団生産制度である人民公社化が始まったばかりの村では、個人の労働をどのように評価するのか、幹部と民衆の関係はどうあるべきかなど、試行錯誤が繰り返されていた。

孫喜旺の妻・李双双は明るく働き者だが、思ったことをすぐ口に出してしまう性格。お人好しで小心者の夫は双双の単刀直入さをはらはらしながら見ている。そんな喜旺の心配をよそに、生産を向上させたい一心の双双は、水路工事に参加したり、濡れ手で粟をもくろむ人々たちを批判したり、若いカップルの自由恋愛を応援したりの大活躍。義理と人情の板挟みになった喜旺はついに家出を決行する…。

●これまで東アジア地域言語学科が授業や課外活動で日本語字幕を制作した中国・韓国映画作品●

<p>五朵金花 五朵金花</p> <p>中国映画 1959 年 監督 王家乙 主演 楊麗坤</p>	<p>善良的夏吾冬 善良的夏吾冬</p> <p>中国アニメ 1981 年 監督 何玉門</p>	<p>青春双曲線 청춘쌍곡선</p> <p>韓国映画 1956 年 監督 韓滢模 主演 ファン・ヘ</p>	<p>白毛女 白毛女</p> <p>中国映画 1950 年 監督 王濱・水華 主演 田華</p>	<p>家 家</p> <p>中国映画 1956 年 監督 陳西禾 主演 孫道臨</p>
---	---	---	--	---

5. アンケート結果(一部仮名遣い等を改めた部分があります)

5-1. 観客からいただいたご意見

5-1-1. 韓国映画「三等課長」に対するもの

a) 作品に対する感想

- ・意外に楽しめた。(20代・男性)
- ・お父さんのヒューマニズムが素敵でした。(30代)
- ・まじめなサラリーマンの映画でした。サザエさんのナミヘイ。(30代・女性)
- ・会社内の関係も面白かった。(30代・女性)
- ・この時代の映画はレンタル等でも無いので、今回見る機会ができ、ありがたかったです。映画には漢江が出たので、ソウル市内だと思ったのですが、昔1年ソウルに住んでいましたが、このころの面影は全く無かったのでここ50年での急速な変化を感じました。(30代・男性)
- ・とても、よかったです。(40代)
- ・良い映画と思いました。(40代・女性)
- ・とても良かったです。(40代・女性)
- ・1961年の作品と聞き非常に微妙な時期に公開された作品だと直感しました。5・16の軍事クーデターの前に公開されたようだなと考えつつ拝見しました。上映後熊本先生の解説を読ませていただいて「やはり!」と思いました。1960年の学生革命とその翌年の軍事クーデターとの間、つかの間の自由を韓国国民が謳歌した時期。この微妙かつ貴重な時期に撮影・公開された作品に接することができ、心から感謝申し上げます。作品に関しては先生方や学生さんたちが素晴らしい批評なり考察、あるいは感想を記しておられて私のような者が申し上げることはないがこの時期の韓国映画には個人的な懐かしさを覚えます、とは言え、私自身は40代で1960年代の韓国映画をリアルタイムで見たわけでは当然ありません。ではなぜ懐かしいのか。それは今から13、4年前福岡で大規模な韓国映画の回顧上映が行われ、開館間もない福岡市総合図書館に足しげく通った20代後半の自分を懐かしく思ったからです。登場人物を演じる俳優たちは懐かしい顔が多く、同時代を生きた訳でもないのに「久しぶりの再会」は不思議な気持ちでした。『ロマンス・パパ』も『成春香』も、『朴書房』も『馬夫』も、後は日本語でも原語タイトルも思い出せる諸々の映画の名場面を今回の作品の上映中に思い出しながら鑑賞させていただきました。(40代・男性)
- ・楽しかった。(50代)
- ・楽しかったです。(50代)
- ・1961年製作にしては、日本植民地下の影響が今より見られた。(50代)
- ・よかった。最後にほのぼのとした。なんとなく懐かしさも感じた。(50代・女性)

- ・オープニングのイラストがかわいかったです。音楽はクラシックやポピュラーでオリジナルではないのですね。スピーディーで古さを感じませんでした。兄弟仲が良いのが印象的でした。(50代・女性)
- ・なつかしい時代を思い出しました。とても見やすく良かったです。(50代・女性)
- ・おもしろかった。それぞれ国が良くて表れている。(50代・男性)
- ・普通。(60代)
- ・とても心が暖くなる映画でよかったです。(60代)
- ・まるで日本映画を見る様に見ました。懐かしい気分でした。(60代)
- ・暖かい家族の長が上司の命令で悩むところ、小心者には分ります。それも家族の絆で解消してよかった。50年後でも日本家屋そのまま？の中の生活にはおどろき。(60代・女性)
- ・面白い。(60代・男性)
- ・金勝鎬主演の映画は以前見たことがあるが、典型的な韓国入役で大変面白かった。(60代・男性)
- ・おもしろかった。(70代)
- ・たいへん面白かった。家庭でも民族衣装ですごせるのが羨ましい。(70代)
- ・福大のこのシリーズではいつも思います。韓国映画史の学習になります。50年代朝鮮戦争、その後の1960年代「三等課長」「風の丘を越えて一西便制」と続く、(私の)韓国映画体験の復習です。(70代・男性)
- ・音声・画面と共に良好であった。内容も当時の韓国の状況の一端に触れることができて良かった。(70代・男性)
- ・日本ととても良く似ていたので(生活)あらためておどろきました。映画もとてもおもしろく良かったです。

b) 字幕に対する感想

- ・短い制限の中でよく字幕づけがされていてすごいなと感じました。(20代・女性)
- ・短くて分かりやすかった。(20代・男性)
- ・びっくり うまかった(30代)
- ・分かりやすかった。(30代・女性)
- ・短い文字制限がある中で作品の本質を表現するのは大変だったと思います。お疲れ様でした。(30代)
- ・聞き取り難しいセリフまで、すごく良くよくされててびっくりしました。直訳ではなく、ストーリーに合わせて、訳されてて、苦労されたんだろうなと思いました。(30代・男性)
- ・とてもよかったです。(40代)
- ・良かったです。(40代・女性)
- ・良かったです。(40代・女性)
- ・スクリーンの限られた場所に限られた文字数で字幕を

付ける作業は苦勞の連続だと拝察いたします。韓国語と日本語は語順がかなり一致し（違うところもかなりあるがそこがまた魅力的とも言えます）、漢字語も共通したものが多く、学習しやすい点もありますのがそれだけに日韓両語の違いもまたしっかりと押さえないければなりません。学びやすいようで難しい、そこが韓国語の魅力なのではないでしょうか。字幕をつける作業が学生の皆さんの韓国語学習を一層深化させたことと存じます。（40代・男性）

- ・学生にしては、すばらしい。ダジャレgood。（50代）
- ・わかりやすく、見やすかったです。（50代）
- ・よくできていたと思います。（50代）
- ・よかった。映画のふんい気がでていた。最後に課長が言う（食事箇所）「生きていくには、つまらん哲学も必要」（？）のセリフ（訳）がよかった。（50代）
- ・わかりやすくよく表現されていたと思います。（50代・女性）
- ・せりふが大変多くて作業は大変だったと思います。自然でわかりやすくストーリーを楽しめました。（50代・女性）
- ・良かった。（50代・男性）
- ・とってもじょうずでした。（60代）
- ・とても短い言葉でも解りやすく映画をゆっくり見ることが出来ました。（60代）
- ・人物像にマッチした。セリフまわしでした。（60代）
- ・見易かったです。（60代・女性）
- ・大変良かったと思います。この字幕付DVDがあればぜひ購入したい位良いで思います。字幕も見易く良かったと思います。（60代・男性）
- ・長からず、目で追うのに苦勞はありませんでした。「ケ・セラセラ」の時代のものの様だが、「パパ」「ママ」は、どうなのでしょう。日本ではソノ頃から、我が子にその様な呼び方はさせない（一般と）様な記憶がありますが…サテ、韓国では？「ミス」「ミスター」とやっついてはしませんか…ハテ？（60代・男性）
- ・よくわかりました。（70代）
- ・読み易かった、去年も観せて頂いた、来年も取り組んで下さい。（70代）
- ・今までみたどの映画よりよかったように思いました。はっきりした字かく、位置がよく、全部なっとく。（70代）
- ・字幕の日本語も努力の跡が見て取れた。良い訳でした。（70代・男性）
- ・昨年上映の「青春双曲線」よりもテロップの入れ方が良いと思う 映画も面白い。（70代・男性）
- ・女優の説明が欲しかった（主人公の奥さん）。そつもなく、良く出来ていたのではないのでしょうか。この「そつのなさ」で仕上げるのにどれだけの学生さん達の学力とエネルギーが費やされたのか！おつかれさま！！（70代・男性）

・わかりやすくおもしろかったです。

5-1-2. 中国映画「李双双」に対するもの

a) 作品に対する感想

- ・中国映画ははじめて見ましたが、面白かったです。（20代・女性）
- ・せっかくの音楽や劇の歌が耳にキンキンくるのがもったいなかったです。強烈な女性、李双双が面白かったです。（20代・女性）
- ・話の流れがつかめなくて残念だった。（20代・男性）
- ・2人の関係がとても面白かった。（30代・女性）
- ・素朴で解り易い内容で楽しかったです。（30代・女性）
- ・人民公社について理解が深まりました。中国農村は貧しく、暮らしはきびしいイメージがありましたが、皆楽しそうでよかったです。プロパガンダ映画、ということでしたが、ストーリーがおもしろかったです。（30代・女性）
- ・都市部といなかの差がはげしいですね。今でもその状況はかなり残っているのかなと思いました。（30代・男性）
- ・喜旺が、農夫にもかかわらず、美男子であるため、いかにも宣伝くさいと思ったが、徐々に慣れました。ゲジゲジ眉毛の李双双や結婚のおせっかいを焼いた近所の女の子がいかにも女性革命主人公の風格がありました。李双双が韻を踏んだ大字報を張り出した際、農民達が抵抗なく読んでいたのを見て、当時の農村でそれほどの識字率があったのかと意外でした。地域差が大きいのでしょうか。労働工分をめぐる訴え、生産隊幹部間での議論は興味深かったです。金樵副書記が思想的に弱いダメ男役、書記の老人はしっかり者というのは、大衆向けプロパガンダ上、意欲を引き出すうまい設定だと思いました。本作品といい、NHKの朝ドラといい、ジブリ映画といい女性主人公の方が大衆には受けるのだらうと思いました。おそらくこのような宣伝・教育の積み重ねが、女性を解放していき、現在の中国の家庭のほとんど、妻管厳状態になったかと思うと、男性としては複雑です。（30代・男性）
- ・とても良い映画でした。昔の中国の事を少し了解致しました。（40代・女性）
- ・とても良い映画でした。昔の中国の事を思い出しました。（40代・女性）
- ・このような明るいタッチで描かれていたのが意外で面白かったです。現代の中国の人がこの作品をどう受けとるのか興味があります。（40代・男性）
- ・女性たちがたくましく、李双双の夫が女性的なのが興味深く思いました。（40代・男性）
- ・少し退屈だった。（50代）
- ・おもしろかった。（50代）
- ・古い日本を思い出したような感じでよかった。（50代）

- ・文化大革命下の中国農村が生々と明るく描かれていた、圧制下でも人民はたくましい。(50代)
- ・明るい映画でした。(50代・女性)
- ・白黒も良いと思った。また来年も期待しています。(50代・女性)
- ・2つの映画とも女性の社会進出の話で、わかりやすかったです。(50代・女性)
- ・貴重な映像を見ることができました。労働者の人々の明るい表情が印象的でした。(50代・女性)
- ・時代の考え方が見える映画でした。おもしろかったです。(50代・女性)
- ・人民公社をモチーフにした作品は初めてだったので、新鮮でした。(50代・女性)
- ・中国らしい映画、それぞれ国がらが良く表れている。(50代・男性)
- ・点数制度のことなど予め勉強しておかないと、わかりにくい部分がありました(古いフィルムのわりには楽しめました)。(60代)
- ・目が疲れ前半居眠りしたけれどやはり家族の絆で人も変わっていくところがよかった。(60代・女性)
- ・面白い。(60代・男性)
- ・今とはかなり違っているが、基本的にはあまり変わっていない良い映画です。(60代・男性)
- ・一般に見ない作品なので楽しみにしています。(70代)
- ・きびしい農民の生活に心うたれる。皆一生けんめいに国のために仕事にはげんでいるのに感動した。(70代)
- ・内容が素晴らしい、現代の私達にも正義の大切さを教えてくれる。(70代・男性)
- ・微妙な時期の作品でしたが、展開がスピーディで明るく、面白かったです。困難であればあるほど笑いが大事なのでしょうね。やはり観る側の事をよく考えているなと思いました。大変な作業お疲れ様でした。(女性)

b) 字幕に対する感想

- ・良く出来ていたと思います。(20代・女性)
- ・学生らしく字幕をつけている所もあって面白いと思いました。そういう部分もっとあっても面白いと思います。(20代・女性)
- ・見やすかった。(20代・男性)
- ・とても良かったです。テンポがあって分り易くて。(30代)
- ・簡潔で良くできていたと思います。来年も是非ガンバって下さい。(30代・女性)
- ・分りやすかった。(30代・女性)
- ・主語を補ったほうが良いと思われる箇所がいくつかありました。ストーリーの良さや、テンポの良さを失わせない、いい字幕でした。(30代・女性)
- ・違和感なく楽しめました。ただ、映像が古いだけに無理に現代の言葉を使う必要もないのでは…という箇所があった様に思われます。(30代・女性)
- ・中国語は今年から学び始めましたが、外国語の中でも実は難しいと思います。今後も頑張ってください。(30代・男性)
- ・私も中国語を少し勉強したことがあるのですが、とても読みやすい字幕でした。ただ、意識された部分において、直訳調になったとしても、元の中国語のニュアンスを残した表記があるのでは？日本語的にこちらが雰囲気が出るのではと思った箇所もありましたが、そのあたりは個人の国語的ストライクゾーンの差によるものと言えます。(30代・男性)
- ・良かったです。(40代・女性)
- ・良かったです。(40代・女性)
- ・横の字幕はよみやすいと思う。しかし、下部にあるので、床面に傾斜がない会場ではふさわしくないと思う。まっすぐ座っているのに後ろの人が「見えにくい」とずれてくるのは不愉快でした。(40代・男性)
- ・学生にしてはすばらしかった。(50代)
- ・かたくなく楽しめました。(50代)
- ・よくできていたと思います。(50代)
- ・訳「欲がまだ消えない」がよかった。今の日中にいいたいとおもった。(50代)
- ・良かったです。(50代・女性)
- ・よくできていたと思います。わかりやすかったです。(50代・女性)
- ・良かったです。見やすかった。(50代・女性)
- ・中国語の発音は難しいですね。字幕はよくできていると思いました。(50代・女性)
- ・どれも簡潔で読み易かった。「マジ？」は笑ってしまいました。(ねらってたのかな?)お疲れ様でした。(50代・女性)
- ・良かった。(50代・男性)
- ・字幕は大変わかりやすく、読みやすく、筋がよくわかりました。今後も頑張ってください。(60代)
- ・見やすかったです(60代・女性)
- ・字幕も見易く、大変良かった。(60代・男性)
- ・「おジャマ虫」は、最近のコトバと思うが、コトバと、映画製作、字幕言葉と、考えさすものあり。(60代・男性)
- ・よくわかりました。(70代)
- ・字幕も良かった。(70代・男性)
- ・字幕の日本語も努力の跡が見て取れた良い訳でした。(70代・男性)
- ・ここ一発の言葉が今風で笑えた。

5-2. その他

- ・来年も期待しております。(30代・男性)
- ・韓国映画、1960年代の韓国語、今とは少し違う韓国語を久しぶりに楽しみながら、原語を聞き取り字幕を読む、この照合作業を気持ちよく行うことができました。

残念なことは、この韓国映画の鑑賞、いや学習！で疲れてしまい、予定の部分もあってか中国映画まで見る事ができないことです。中国語も少々学習経験があるのですが字幕と原語を照合するなどという大それたことはできませんので…関係者の方々、このような機会を設けてくださり心から御礼申し上げます。第3回も足を運びたいと思います。（40代・男性）

- ・寒かった。（50代・女性）
- ・私は福大文学部文化学科の卒業生です。当時は、まだ東アジア地域言語学科はありませんでした。後に中国語、韓国語の勉強を始め現在も苦労しているので、学生さん達には記憶力の良い時期にしっかり勉強してほしいです。また中国も韓国も1970年代に初めて行ったので、人民公社や少年官に見学に行ったことや港町で治安の悪い釜山の町にガイドさんと出かけた事などを思い出しました。アルマイトの食器も懐かしいです。来年も楽しみにしています。（50代・女性）
- ・来年も楽しみにしています。（70代・男性）

5-3. 字幕作業参加学生の声（回答者総数19名、韓国映画9名・中国映画10名）

1) 昨年も字幕制作に参加しましたか。

参加した	8
参加しなかった	11

2) 字幕制作にはどのように参加しましたか。（複数回答可）

	全体	韓国映画	中国映画
台本講読	15	7	8
字幕草案作成	15	9	6
日本語検討	17	7	10
上映会	13	3	10
その他	0	0	0

3) 語学力の向上に効果がありましたか。（複数回答可）

	全体	韓国映画	中国映画
効果はなかった	0	0	0
効果はあった	31	13	18
聞き取り力	5	2	3
読解力	11	6	5
日本語力	12	5	7
その他	3	0	3

「効果はあった」に「その他」と答えた学生の記述

- ・口語表現や会話のリズムなど、教科書ではわからないものをたくさん見られた。
- ・ある程度単語も覚えた。
- ・同じような単語が沢山でてくるので、単語力もあがったと思う。

4) 字幕公開についてどう思いますか。

必要なし	0
必要	19
わからない	0

「字幕公開は必要」と答えた学生の具体的意見

- ・公開する方が字幕制作に意欲がわくから。
- ・勉強した成果を出せるいい機会だからです。
- ・公開するというのが良い意味でプレッシャーとなり、良いものを作ろうという気持ちを強めてくれるし、自分の名前がエンドロールに書いてあるのを見て喜びが倍増するから。
- ・自分達の努力の成果をお客さんに見てもらえるから。
- ・やる気につながるし、追いこまれた方が頑張れる。
- ・多くの人にみてもらう方がやりがいがあるから。
- ・専門の方が製作する字幕と違う味があると思うから。
- ・一般の方に昔のアジア映画を知ってもらえるから。
- ・プレッシャーがあったほうが、やる気が出ると思います。
- ・公開されると達成感というか、やったぞ！という実感がある。
- ・地味な作業だが、発表することで、ヤル気につながったと思う。
- ・せっかく字幕作業をしたものなのでたくさんの人にみてもらいたいから。
- ・市民の方も映画を楽しめるし、私たちも良い発表の場になるから。
- ・今回の字幕公開で、母と祖母と一緒に見に来てくれました。1960年代の映画をみる機会もなかったので、良かった、楽しかったといっていました。一般公開はいいとおもいます。
- ・せっかくなので多くの人に見てもらいたいので。
- ・やはり努力の集大成ですし、市民のみなさんからの評価も良かったと聞いているので、アジアフォーカスとの連動事業にすることで映画祭自体も盛り上がると思います。
- ・映画を作った後の集大成だと思うから。
- ・自分の字幕作業を行った結果をぜひ見てほしいから。
- ・誰かにみてもらえる方が頑張れると思うので。

5) 字幕制作を語学力の向上に役立てるとするとどのような方法が適切だと考えますか。

- ・各自で訳をしてきて、意見を出し合うことが大切だと考えました。
- ・理想を言うと、参加者全員が台本読みの段階から作業に参加できれば良いと思う。原文を読んで訳し、さらに映像で確認することによって、より理解が深まると思うから。
- ・「今天我休息」のようにスライドを使いながら字幕を作るのはとても良いと思います。

- ・台本を、ひとまずは自分で訳してみる。先に、スポッティングをしてしまってから訳すようにしたら、映像と音をききながら、中国語の文字もみれるのでいいかもしれない…
- ・今のままでいいと思います。
- ・今の方法で充分役に立っていると思う。
- ・今までのように一から台本を読んでいくのでいいと思います。
- ・聴く、読む、訳すで、自分たちで読み込んでいくこと。
- ・字幕の原文と照らし合わせながらの推こう。
- ・時代背景に目を向けること、日本語理解（登場人物にふさわしい口調であるか、標準語や方言であるか）
- ・文法どおりではなく、普段韓国の方たちが日常会話で使う韓国語を場面に応じて聴きとったりして役立つのがいい。
- ・それぞれのセリフがどのような場面でどのような意味で言われているかを理解して覚える方法。
- ・まずは、辞書を引かず、映像と韓国語だけをみて字幕を考えることがいいと思いました。
- ・自分たちで訳して、内容を把握した後、字幕なしでもう一度観てみる。
- ・時間があれば、セリフの講読を細かく行ってから、字幕作業に移るのが良いと思いますが、半年ぐらいでは仕上げようと思うと時間が足りないので、今行っている手順でいいと思います。「場面によって、使うセリフ」をじっくり考えることができるし、韓国語の会話のリズムや韓国人的な発想の会話を学ぶことができると思います。しかし、講読という観点から見ると、字幕の文字数に合わせて日本語をつくるので、あまり深く考えないから、学習というよりは、単純に字幕を付ける作業をしたという認識にしかならないような気がします。
- ・グループを決めて訳をして、それを考えるのが適切だと思う。
- ・朝鮮語の語学力も大切だが、日本語の語学力も気をつけなければならないと思った。まず日本語を知る！！
- ・やはり聞きとりと日本語力への影響があると思うので字幕を作る時が一番役に立つとおもいます。字幕を作る時に、今回同様学生主体でやらせた方がいいかも？

6) この活動に参加した感想

- ・台本講読の時は中国語がわからずよくわからないまま参加していましたが、合宿での日本語分の検討の時に少し意見をいえてよかったです。上映会は人がいっぱい来て下さってびっくりしました。
- ・来年は、もっと本格的に字幕制作作業に協力できるようになりたいと今回参加して感じました。作品を皆で仕上げたときの達成感をまた味わいたいと思うような活動でした。
- ・今回は台本読みの段階から参加できたので、自身の中国語力向上に大いに役立ったと思う。今年の「白毛女」に引き続き字幕制作に関わることができて本当によかった。李双双の弾丸トークはすごかった！！
- ・初めて字幕制作に参加して、とても大変でしたが、学年をこえて交流しあいながら中国語をまなぶことができてとても良い刺激をもらいました。次の字幕制作も頑張りたいです。
- ・1つのことをやりとげたという達成感を、大学生活ベスト3に入るくらい味わえました。笑、最初は正直面白くない内容だと思っていたけど、字幕制作が終盤に近づくにつれ、映画そのものに愛着が生まれて、いつのまにか、まねができるくらい登場人物の行動、ことばを覚えていました。映画の時代背景は少し前の中国の農村だけど、その中で生活している人々の言葉や行動を何度もみているうちに、現代中国を考えるにあたっても通ずる見方を感じることができました。
- ・あまり自分は力になっていませんが、この活動に参加して楽しかったです。また次参加するときはもっと中国語力を上げて、力になれるようになりたいです。
- ・この活動に参加しないと経験できないことがたくさんありました。字幕の映画はあまり好きではなかったけど、抵抗なく観れるようになりました。
- ・私は今年から、この字幕制作に参加しました。台本を読んでいたり、日本語を考えたりで大変だったけれども、完成した時の達成感はすごくありました。そして、何よりも、この活動を通して、学年を問わず多くの人と関わることができて本当によかったと思っています。せっかくこのような機会が毎年あるので、もっと多くの人に参加してもらいたいと思いました。ありがとうございました。
- ・皆でわいわい作るのがとても楽しかったです。他学年と接触する機会があまりないので、貴重な場だと思います。
- ・大変でしたが、やりとげたぞ！という充実感があって大変おもしろかったです。やはり、このシーンにココッ！という字幕ができた時は本当に嬉しいですね。大学に来ているのだから、なんか「成しとげた」といえる物を作る為にも字幕制作はこれからも続けた方がいいんじゃないかな？と思います。間先生ひとまずお疲れ様でした。ありがとうございます！！
- ・一言、一言の単語に目を向ければ、知らない単語が多かった。しかし、一場面、一場面に日本語を当てはめてぴったりはまった訳になった時は、うれしくてやってよかったと思いました。
- ・字幕作業は大変だったけど、良い経験になりました。
- ・去年参加したときより、訳や日本語を考える力がついたような気がしました。日本語文の検討の時、先輩や同級生のいろいろな意見が聞けて面白かったです。ま

た時間があれば参加したいです。

- ・大変貴重な体験になりました。字幕制作は予想以上に大変でした。単に韓国語を日本語に訳すだけではなく、自然な言い回しや、目が疲れない程度の量を考えなければなりません。大変時間はかかりましたが、達成感を味わえました。また1960年代の映画を通して、当時の社会状況や、家族のありかたを知るのは大変興味深かったです。
- ・すごく大変でした。でも、字幕を作成する大変さだけではなく、訳したものをどう日本語らしく、かつ短時間で伝えられるようにするかという日本語力も関係して、難しかったけど、楽しかったです。
- ・韓国の白黒映画を見る機会というのは珍しいし、字幕をつけるという体験もなかなかできないので、素晴らしい活動だと思います。私は2回目ですが、昨年よりも要領よくスムーズに作業を進めることができました。少人数で大変だったこともありましたが、上映会も成功して、とても良かったです。来年は下の学年の人達にも積極的に参加してほしいです。
- ・この活動に参加して日本語力が向上したと思うし、決められた字数の中で日本語を考えることができたし、その時代背景が分って良かった。
- ・字幕作業に参加して自分がどれほどの実力があるのかわかった。文献講読とは違って字幕は直訳では成り立たず、日本語能力も十分必要だと思った。日本語に自信がない私は字幕作業をするにあたって上手くできるか不安も感じましたが、日本語、朝鮮語の語学力が向上したのは確かなものでした。字幕作業は思っていたより難しかったが、やりがいがあった作業だった。
- ・今回は去年の作品よりもっとコメディータッチ、歌の部分がなかったのでやりやすかったです。ただ、今回はカタカナ語が多かったので字幕の字数制限に合わせるのが大変でした。今回は予定が合わず、上映会にも行けなかったのが残念でした。

6. アンケート結果について

6-1. 韓国映画「三等課長」

まずは作品についてであるが、古い日本映画をみるようで懐かしげな感じがしたとの意見が散見された。こうした見方は、実は主人公の家の構造が日本式となっていくことから一面では時代背景を鋭く突いたものでもあったと言える。植民地時代の名残がそのままに残った建物であったわけである。時代背景という点では、朴正熙による軍事クーデター以前のつかの間の自由を謳歌した時

代の作品であることに注目された方もいらっしまった。

字幕については、肯定的な評価を得られたようであった。実のところ、この映画は台詞がかなり多く、字幕をつけることには相当の困難が伴った。第1回目の上映作品に比べれば台詞の数は2倍であった。まさに、「おしゃべりな映画」⁴という印象であった。こうした中、一定の評価を得られたことは胸をなでおろす心境であった。

全体として肯定的な評価をいただいたとは言え、実際のところは、教員にも学生にも訳をつけるにあたって相当の葛藤があったのは確かである。駄洒落の訳し方、流行語をはじめ時代を反映する言葉、こうした言葉をいかに効果的に訳するかという議論には相当の時間を要した。ただ一点、教員として気を使った部分がある。それはいかに喧嘩などのシーンであろうと言語を下品にしないことであった。暖かな家庭の雰囲気を与え、作品に落ち着きのある安定感を与えるのに、表現に行き過ぎたものがないことを意識したわけであった。

（熊本）

6-2. 中国映画「李双双」

作品について、ヒロインの李双双とその夫の個性や二人の関係に注目した観客が複数名おられた。これは中国文学研究者の陳思和がこの作品の隠れた構造であるとする「男女の逆転現象」によって生じる喜劇性を感じとったためでないかと思われる。この作品が21世紀の日本の観客にも受け入れられたことは、単なるプロパガンダ映画ではなかったことの証明にもなるだろう。

一方、本作品の大きな特徴である登場人物たち、とくに李双双の言葉の面白さが、字幕によってきちんと伝わったかどうかについてはいささか心許ない。また中国の当時の政治体制や社会のありかたなどを反映できたかという点についても改善の余地は大きかったと言える。その意味からも、「直訳調になったとしても、元の中国語のニュアンスを残す方法のほうが雰囲気が出るのでは」という30代の男性観客のご指摘は傾聴に値するものである。

さらに多く見られたのは、現代風の言い回しについてのご意見である。これには好意的なものと批判的なものの両方があった。今回の私たちのささやかな実験は、言語感覚は十人十色であるということを改めて確認しただけに過ぎないかもしれない。私見ではあるが、観客が面白いと感じる字幕を作るためには、流行語の使用よりも、リズムやテンポに気を配った日本語字幕を作るほうが効果は大きいのではないかと考える。

（間）

⁴ 熊本勉「おしゃべりな映画『三等課長』」, 上映当日のパンフレット解説参照.

7. おわりに

本学科の学生による日本語字幕作成成果上映会はこれまで2回行われており⁵、現在、3回目の上映会を準備中にある。これまでの2回の上映会の経験を踏まえ、よりよい上映会にすべく努力しているが、毎年、学生の顔ぶれも少しずつ変わり、今も試行錯誤の連続である。しかし、従来教員がやっていた仕事も学生に任せられる部分が増えてきている。わずかずつではあるが安定的に作業を行う環境が整いつつある段階であるように思われる。

わずかに一、二歩を歩き始めたに過ぎない上映会であるが、多くの市民の方々に私たちの字幕で映画を見てい

ただけたことは、大きな刺激となった。その一端は学生たちのアンケートにもうかがうことができそうである。

字幕作業が本学科での語学学習において占めるウェイトは参加人数を有志に絞っていることや時間的な制限などもあり、必ずしも大きいものとは言えないだろうが、この2回の足跡、あるいはもう一步踏み出そうとしている次回の上映会を通じて、私たちが発信できる市民の方々へのメッセージは決して小さくはないものと考えている。また、それを通じて得られる学生たちの達成感もまた、決して小さくはないものであらうと思われる。

(熊本)

8. 報道資料等

(1) アジアフォーカス公式ガイドブック

協賛企画 第2回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会 ～韓国映画『三等課長』+中国映画『李双双』～

福岡大学人文学部東アジア地域言語学科有志学生が制作した 1960 年代初頭の韓国および中国映画の日本語字幕を学習の成果として発表します。

●日時：9月23日（木祝）13:00 開場

●会場：エルガーラホール 7F 中ホール ※アクセスは P35 をご覧ください。

●主催：福岡大学人文学部東アジア地域言語学科

●後援：駐福岡中華人民共和国総領事館

アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会

●入場：入場料無料、事前申し込み不要

☆お断り：上映はプロジェクター投影によるものです。古い作品のため、映像・音声
が不鮮明な部分があります。あらかじめご了承ください。

●上映作品：

(1) 韓国映画『三等課長』13:30 ～

1961 年 監督：李奉来（イ・ボンネ）

リズム感ある台詞で構成された本格コメディ映画。

社会風刺を所々にうかがわせる作品でもある。

（映像は韓国映画資料院の提供によるものです）



(2) 中国映画『李双双』15:30 ～

1962 年 監督：魯韜（ルー・レン）

人民公社化初期の農村におけるさまざまな問題を軽妙なタッチで描いた作品。なかでも新しい女性像をいきいきと演じた張瑞芳とその夫役の仲星火の掛け合いの妙はみもの。



●問合せ：福岡大学人文学部東アジア地域言語学科 間（あいだ）

TEL：092-871-6631 メール aida@fukuoka-u.ac.jp

⁵ 2010年9月11日（於：紀伊國屋書店福岡本店特設会場）、カルチエ福大でも韓国映画『青春双曲線』を上映し、熊木が解説を行い、学生有志1名がインタビューに答えるなどした。あわせて間が「中国アニメーション字幕制作ワークショップ」を行った。当日の様子については、以下URLを参照。http://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~regionalfu/Quartier/Quartier_Septembre.html

(2) アジアマンズ公式ガイドブック


●中国・韓国
第2回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会
～韓国映画「三等課長」+中国映画「李双双」～

中国・韓国映画は日本でもすっかりお馴染みですが、古い作品の中には日本語字幕の付いていない「幻の作品」も多くあります。福岡大学人文学部東アジア地域言語学科の学生が、昨年に引きつづきそれらの作品の中から各1本を選んで日本語字幕を付け、成果発表上映会を行うという、映画ファンにとってはうれしい企画です。


期9月23日(木・祝)13:30～17:30
所エルガーラ・7F中ホール(中央区天神1丁目) 料無料

<上映作品>
韓国映画「三等課長」(1961年)、中国映画「李双双」(1962年)

間福岡大学人文学部東アジア地域言語学科
TEL.092(871)6631(内線)3911 Eメール:aida@fukuoka-u.ac.jp
http://www.hum.fukuoka-u.ac.jp/eas/



韓国映画「三等課長」(1961年)



中国映画「李双双」(1962年)

(3) 毎日新聞

毎日新聞
2010年(平成22年)9月18日(土) 福岡 地域 18

福岡
EVENT WIDE TOPICS

福大生が字幕制作
韓国映画と中国映画
中央区で23日に上映

福岡大学人文学部東アジア地域言語学科の学生らが日本語字幕を付けた韓国映画「三等課長」と中国映画「李双双」を、9月23日(木・祝)13:30～17:30、中央区天神1丁目のエルガーラ・7F中ホールで上映する。この上映会は、同学科の学生らが昨年に行った字幕制作の成果を発表する。上映会では、同学科の学生らが制作した字幕を、上映前に紹介する。上映後は、同学科の学生らが制作した字幕を、上映前に紹介する。上映後は、同学科の学生らが制作した字幕を、上映前に紹介する。



イベントで参加者に字幕の作り方を指導する内田さん(右)

(4) アジアフォーカス公式HPスタッフブログ

アジアフォーカス・福岡国際映画祭事務局だより

プロフィール

[RSS]
[XML]

カテゴリー

アーカイブ

March 2011 (1)
February 2011 (4)
January 2011 (3)
December 2010 (2)
November 2010 (2)
October 2010 (1)
September 2010 (26)
August 2010 (6)
July 2010 (2)
June 2010 (1)
May 2010 (1)
April 2010 (2)
September 2009 (43)
August 2009 (13)
July 2009 (13)
June 2009 (4)

最近の記事

東日本大震災の被災者へのお見舞い(2011/03/16)
マッド探偵 (ディテクティブ) 公開中らしい(2011/02/24)
写真集『トーキョールキノグラフィ』出版記念イベント(2011/02/23)
アジアフォーカスにも来たあの監督が再びベルリンで、今度は金熊賞！(2011/02/21)
The Golden Bear goes to Jodaieye Nader az Simin by Director Asghar Farhadi!(2011/02/21)
「扉のむこう」神戸で上映(2011/01/24)
東京でアジアフォーカス！？(2011/01/20)
「アオザイ」ボイスオーバー上映会(2011/01/14)
越境するアジアの現代文化 ― 現状と可能性 ―(2010/12/13)
北九州市民映画祭に行ってきました(2010/12/13)

最近のコメント

ボランティアレポート⑥「11月10分前」 | TOP | ボランティアレポート⑥「サムソンとデリラ」

ボランティアレポート⑦ 福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会

福大生による字幕制作発表会がエルガーホールで開催されました。

韓国映画「三等課長」と中国映画「李双双」が上映され、多くの方々が来場されていました。



・福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会
中国映画「李双双」レポート

福大生が字幕制作に挑戦した中国映画「李双双」を見ました。上映前は、映画の時代背景やストーリー、豆知識などが書かれたパンフレットを熱心に読んでいる方が多く、今か今かと上映を楽しみにしているのが伝わってきました。肝心の映画の内容は、明るく、働き者の女性、李双双が村をよくするために大活躍する一方、正義感の強い性格が故に夫婦喧嘩をして旦那が出て行ってしまったり…と、とても親近感の湧くお話で、日本語訳では大学生ならではの今時の言い回しを使って会場の笑いを誘うシーンも見られました。上映前は緊張しているように見えた福大生の皆さんも、観客の皆さんの様子を見て安心したのか、上映後には思い入れの強いシーンや、観客の反応の大きかったシーンの話をしたりと笑顔が溢れ、発表会は大成功の様子でした。それにしても、いつの時代、そしてどの国でも女は強いですね。

広報ボランティア A・I

カレンダー

<<2011年07月>>

月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2010.09.24 | Comments(0) | Trackback(0)

タイトル：

URL：

名前：

トラックバック - <http://www.focus-on-asia.com/jimukyoku/article/115?trackback>